

概念主義論争とカントの知覚論

中野裕考

長い間カントに知覚理論はないと考えられてきたが、近年その見方が改まりつつある。客観的に妥当するものとして信念を明示的に表現する判断に先立って、その素材として受容される直観ないし知覚が自発性によって分節化されている、このようなカント理解が広がってきている。そのきっかけの一つが概念主義／非概念主義論争である。

信念の正当化を行う際にもちだされるはずの根拠は、それ自身また信念でなければならないのか、あるいは非命題的な知覚でもありうるのか。もし後者だとすればこの知覚には概念把握される内容だけが含まれるのか、それとも別種の内容があってもよいのか。けれども非概念的な内容なるものが判断の理由になりえるのか。こうして信念の正当化という問題の一つの焦点が知覚の本性に当てられるようになるにつれて、直観と概念の関係について先駆的な分析を施したカントが読み直されるのは自然な流れだった。

その中でも本稿は、ハンナの非概念主義的解釈とマクダウェルの概念主義的解釈に注目する。一つには、両者がそれぞれ判断の理由となる非概念的な内容の存在を認める非概念主義、そしてそれを否定する概念主義の側からカントを理解する代表的な論者だからである。しかしそれ以上に、このように対立する両者が、判断に先立つ知覚そのものが備える構造や分節化といった点では意外なほど親和的な理解を示しているという事実を強調したいからでもある。本稿は、両者のカント理解からカント本来の知覚論の輪郭を浮かび上がらせつつ、翻って現代の論争に対するカントの側からの提案を素描する試みである。

1. ハンナの非概念主義的解釈

ロバート・ハンナは2005年～2011年にかけての一連の論文で、自らの唱える「カント的非概念主義」こそが、あらゆる概念主義に対抗しうる唯一の方途だと主張している (Hanna 2011a, 333)。これ以外には、マクダウェルを念頭に置いて名づける「高度に洗練された概念主義」に打ち勝つ仕方では非概念主義を貫徹することができないからである (Hanna 2011a, 345)。

1.1 「二つの手」論証

非概念主義に含まれる多くの変種を分ける区分のうち、最も大まかなものは、状態非概念主義 (所有非概念主義、相対的非概念主義) と内容非概念主義 (本質的非概念主義、絶対的非概念主義) との差異である。ハンナも依拠するスピークススの定式化を引用しておく (Speaks 2005, 359-360; cf. Hanna 2008, 46-50; Hanna 2011a, 328)¹ :

絶対的非概念主義：ある心的状態が絶対的に非概念的な内容をもつのは、心的状態が信念、思想等々とは異なった種類の内容をもつとき、またその時に限る。

相対的非概念主義：(ある時点 t での) ある主体 [agent] A の心的状態が相対的に非概念的な内容をもつのは、その心的状態の内容が A によって t において〔概念的に〕把握され (所有され) ていない

内容を含むとき、またその時に限る。

内容非概念主義とも呼ばれる前者においては非概念的内容が、事実として概念と結びついていようといまいと概念的内容とは種類を異にすると考えられている。状態非概念主義²、すなわち後者においては表象内容の種別的質的差異は問題になっておらず、当該時点において概念によって特定され把握されているかどうかだけが問題になっている。後者は、現に概念によって把握されていない表象内容が確保されておればそれでよしとし、その内容が本質的に概念によっては特定できないことまでは要求しない。それに対して本質的に概念によっては把握できない表象内容があると主張するのが内容非概念主義である。

ハンナが指摘する通り状態非概念主義は最近のマクダウェルの立場のような弱められた概念主義を打ち負かせない。その主要論拠である知覚経験のきめ細かさ [finegrainedness] は、現に概念的に特定されていないという意味で非概念的であるにすぎず、概念的内容との質的な差異まで示すものではないからである。真正なる非概念主義は本質的非概念的内容が知覚経験のうちにあることを示すものでなければならない。ハンナによるとカントこそこの立場の先駆者である。多くの場合カントは概念主義の開祖として言及されるが、ハンナはいくつかの典拠を挙げて非概念主義者カントを示そうとしている。本稿の見るところ、残念ながらその多くは説得力のある根拠づけにはなっていない³。しかし「二つの手」論証と名づけられた不一致対称物に基づく論証は、簡単に否定できるものではない。

前批判期以来カントが論ずる不一致対称物 (II 377-383, II 385-419, IV 285-286, VIII 131-147) に関してハンナが挙げている論点を、適宜用語等にアレンジを加えながら骨子だけ示すと、次のようになる。私の右手とその鏡像のように、不一致対称物は現に存在するし論理的にも可能である。不一致対称物とは、形や大きさが同じで形態の間の一対一の対応づけができ、いかなる記述的差異ももたないにもかかわらず、異なる空間的位置にあり、また平行移動によって重ね合わせることもできないような複数の対象である。そうした対称物相互の間に概念的差異はないが、両者の差異を直接的に知覚することはできる。従って本質的に非概念的内容は存在する (Hanna 2011a, 358f.; Hanna 2008, 55f.)。さて、私の右手や左手の代わりにどんな経験の対象を考えてみても、右や左という規定に関して同様のことがいえる。だから右や左といった本質的に非概念的な区別は経験的なものではなく、アプリオリである。こうして形式的でアプリオリな本質的非概念的内容が存在する (Hanna 2011a, 362)。一般化していえば、本質的に非概念的内容によって表象されている経験の対象の性質がどのように変化しようとも、その空間時間性は変質されない。だからいかなる経験の対象に関しても本質的非概念的形式的表象はアプリオリである (Hanna 2011a, 371)。

「二つの手」論証が確立しているのは内容非概念主義であって状態非概念主義ではない。問題になっているのは概念を通じて把握することが原理的にできない、概念的内容とは本質的に異なった種類の内容なのである。不一致対称物の間の差異は「それらの物質的对象や出来事と同じ空間時間のうちに埋め込まれた一つの自己中心的中心 [an egocentric center] の視点からのみ適切に規定することができる」(Hanna 2011a, 377)。それは、他ならぬカントの「感性の主観的形式」としての空間時間のうちに、「自己中心的ないし一人称の観点から」(Hanna 2011a, 353) 構造化された内容なのである。

ハンナは、空間時間が感性の主観的形式だという認定のうちに、知覚主体の視点が知覚される諸対象や環境世界と同じ空間時間の内部に埋め込まれているという身体性の見直しを含めている。身体を通じて環境と相互に交渉しつつ空間時間のうちに自分自身と知覚対象を位置づける働きには、「低レベルの自発性」と「低レベルの規範性」が含まれている (Hanna 2008, 62; Hanna 2011a, 386)。直観や知覚の受容は主体の自発性とは無縁ではなく、むしろ「自分自身の身体之感覚運動的コントロール [sensorimotor control]」という意味での自発性を前提している。それによって知覚内容は信念に対して「原合理的

[proto-rational]] な「身体の固有の理由」を提供する (Hanna 2011a, 387)。ハンナによると、悟性の知的総合とは区別される構想力の形像的综合としてカントが記述しているのはこの自発性である。

1.2 はぐれ対象

問題は、ハンナがある地点でカントの枠組みから明示的に離反していることである。Hanna 2011b は、自らの非概念主義的解釈が第二版演繹論とうまく調和しないと認める。曰く、非概念主義の一つの帰結は「偶然的にか必然的にか、カテゴリーも含めたいかなる概念の下にも収まらない」「はぐれ対象 [rogue objects]]」の存在である (Hanna 2011b, 402)。それはマジック [magic]、純粋な偶然、生命、意識、自由など (Hanna 2011b, 409) のような、「因果性という点で逸脱しており、法則論的に無作法な [causally deviant and nomologically ill-behaved]]」ものであるため、人間の概念的ないし判断的経験の対象ではないか、あるいはまたそうありえない (Hanna 2011b, 407)。「概念なき直観は盲目である」という際のカント本来の趣旨は概念なき直観は存在しないということではなく、客観的に妥当な判断のためには直観は概念と結合しなければならないということではない。

ところがハンナの見るところ、第二版演繹論の狙い及び結論はこのような非概念主義に抵触している。カントは経験の、また知覚のあらゆる対象にカテゴリーが妥当すると論じるが、これでははぐれ対象の存在を否定することになって非概念主義を危険にさらしている。そこでハンナは第二版演繹論の結論を次のようなテーゼへと緩和するよう提案する。「カテゴリーは、客観的に妥当する判断によって表象されたあらゆる対象、またそういう対象だけの経験の可能性の、必然的でアプリアリナ条件である」 (Hanna 2011b, 413)。これは、カテゴリーの妥当性を知覚経験そのものではなく、そこから形成される客観的認識へと限定しようという提案である。

事柄の当否は措くとしても、一つ確かなのはハンナの非概念主義的カント解釈が、本質的非概念的の内容の存在を評価する一方で、カントの記述に完全に忠実なものではありえなかったという事実である。もとよりそれは、完全に忠実なカント解釈を形成することよりも事柄としてより堅固な哲学的見解を手に入れることを優先した結果である。ただカント本来の立場を浮かび上がらせたい本稿にとっては、このようなハンナの振る舞いは示唆的である。私たちはハンナによって次のように推測するよう促されている。すなわち、非概念的の内容を認めつつ、あらゆる知覚に対するカテゴリーの妥当性を堅持する、これがカント本来の立場だったのではないか。

2. マクダウェルの概念主義的解釈

『心と世界』や近年の *Having the World in View* においてジョン・マクダウェルは概念主義の側からカントを理解している。

2.1 知覚内容の概念的 성격

マクダウェルのカント理解によると、知覚ないし直観の受容はそのものとして主体の自発性と不可分であり、その経験内容は概念的でのみありえる。

ここで第一に銘記されるべきは、とりわけ近年顕著であるようにマクダウェルは判断や信念との対比における知覚経験の特殊性に十分に留意していることである。直観の内容は不随意的に「強いられる [necessitated]]」「課せられる [imposed]]」のであって、判断におけるように主体が思考内容を自由に

選び取り責任を負うという仕方では形成されるのではない (McDowell 2009, 12f.)。判断は論証的活動 [a discursive activity] であるのに対し、直観はそうではない (McDowell 2009, 262)。判断においては命題的内容が明示的に展開されるのに対し、直観における概念的内容は命題的ではない (McDowell 2009, 268f.)。直観は信念の理由になりえる限り「理由の論理空間」のうちに位置づけられるのだし、それはまさに直観が概念的の内容を含む限りにおいてのことなのだが、しかし信念に対する直観の関係は帰結に対する前提の関係のような推論的構造をもたず、直観は「直接的に」世界のあり方を明らかにする (McDowell 2009, 270)。このように直観中の経験内容が概念的だといっても、マクダウェルはこれを判断の産物としてではなく、むしろ非命題的非推論的なものとみている。

この立場は、受容性と自発性、感性と悟性の活動を相互に独立の働きとして捉える二元論とは根本的に異なっている (McDowell 2009, 136f.)。『心と世界』以来の言い回しを引くと、直観の受容は自発性とは「概念的にでも分離できる寄与を行うことがない」(McDowell 1996, 9)。ここから「まったくの受容性」(McDowell 2009, 13-22, 27-29, 38-43) を想定しているとのセラーズ批判が展開されることにもなる。他方で本稿にとって重要なのは、自発性との協働を含まない受容性は不可能だ、という際に念頭に置かれている自発性はカントにおける構想力のことであり、統一を含む直観として形式的直観が言及されていることである (McDowell 2009, 26, 28)。従ってマクダウェルの主張をカントの言葉でいいかえれば次のようになる。直観の受容は構想力の超越論的総合を通じて実現するのであり、これによって形成される形式的直観は判断を前提とせずに非命題的表象内容を含んでいる。

しかしマクダウェルが概念主義者なのは、こうした非命題的表象内容をも概念的内容とみなすからである。その際に重視されるのがカントの次の文言である。「判断において様々な表象に統一を与えるのと同じ機能が、直観における様々な表象の単なる総合にも統一を与えるのであって、この機能を一般に表現すると純粹悟性概念という」(A79/B105)⁴ (McDowell 2009, 30, 260)。直観において統一される内容は判断において統一される内容と同じ種類の [of the same kind] ものであって、もし我々が判断を下すことができなかつたとしたらこのような直観をもつこともなかつたはずだ (McDowell 2009, 264)。直観における内容の統一を何か概念以前の分節化とみなすために「悟性の原概念的 [proto-conceptual] な寄与」などというものを想定する必要はない。

とはいえマクダウェルはあらゆる直観内容が現に概念を通じて特定されているという立場を近年では放棄している (McDowell 2009, 259)。ショウジョウコウカンチョウ [a cardinal] を見ても、その概念をもっていないためただの鳥としか思わない人、鳥とすら思わないが動物だとは思う人、あるいはその直観を未分化なまま放置している人もいるだろう。直観を通じて与えられる経験内容が、いつも適切な概念によって特定されているという必要はない。この意味でマクダウェルは、概念によって特定されていない内容や、その内容を種別化するための適切な概念を所有しないままにもたれている心的状態を認める状態非概念主義を許容する。それでもなお概念主義陣営に属しているのは、あらゆる経験内容は論証的活動を通じて孤立させてやりさえすれば、概念的に分節化されるに適していると考えからである (McDowell 2009, 264)。判断に先立って直観は与えられるし、この直観はさしあたって未分化なままの内容を含むかもしれない。けれども悟性の論証的活動はそうした直観内容の諸側面を分析し際立たせることで、明示的な概念的内容を取り出すことができる。「論証的活動のためのポテンシャル」が直観内容を形成している限りにおいて、たとえ概念を通じて特定されていなかったとしてもその内容は概念的なのである (McDowell 2009, 266)。このようにしてマクダウェルは、命題的でも論証的でもないままの直観内容を概念的とみなし、状態非概念主義をも取り込めるような「高度に洗練された概念主義」(Hanna 2011a, 344) を形成し

ているのである。

2.2 感性の形式

マクダウェルは直観の直接性を、「主体の視点」からみて「そこ」とか「あの」といった指示語で特定されるものとして説明している (McDowell 2009, 32)。これによって空間時間中の、主体の視点に中心化された秩序における位置の区別も概念的 content として処理しようというわけである。「そこ」とか「あの」というのも主体の視点を起点として直接的に現前する対象の配置を示しているが、マクダウェルはこのような一人称の視点に基づく秩序づけが非概念的 content の存在を示すものとは考えないし、概念の一般性を損なうものともみなさない (McDowell 2009, 33)。つまり「概念」とはマクダウェルにとって「昨日」「今日」「ここ」「そこ」等々と表わされる文脈依存的なものをも包含するものなのである。それも概念的だというのは、それを特定する能力が「原理上は経験そのものの持続を超えて存続しうる」からである (McDowell 1996, 57)。ある内容を表象する能力が一人称現在の視点に制限されない限り、それは概念的といってよいのである (McDowell 1996, 120)。

「概念」をこのように理解するマクダウェルは、その反面でカントの空間時間論には批判的である。問題視するのは総合を前提した形式的直観ではなく、あくまでも感性の形式としての空間時間である (McDowell 2009, 76)。非概念的 content を否認する概念主義者としては、悟性による総合の圏域外に、概念に還元できない固有の表象 content の秩序づけの原理を認めることはできない。

また超越論的観念論批判という意味でも、マクダウェルは感性形式としての空間時間論には否定的である。それは認識の主観的条件がすなわち客観的でもあるという正しい観念論から我々を逸脱させ、客観そのものを認識することを保証しない単なる主観的観念論、あるいは主観主義的心理学に導く。さらに対象の直観の空間時間性を、我々の感性に関する偶然的心理学的な事実へと転じ、「統覚の自発性に外から与えられる」ような何ものかを「形式的直観の質料」として要請してしまう (McDowell 2009, 79)。そうすると対象それ自体は統覚の統一の射程の外に不可知のものとして残されることになり、結局カントが保証しようとした認識の客観性は台無しになってしまう (McDowell 1996, 40-45)。従って「もし我々がカントの批判的洞察を保持しようとするのなら、我々はこのヘーゲル的構想を必要とするのである」 (McDowell 2009, 81)。認識の真の客観性を確保するためには、統覚の影響の及ばない感性の形式という発想を放棄しなければならない。

マクダウェルが打ち出す立場の妥当性を検討することは、本稿の課題ではない。確認しておきたいのは、マクダウェルがカントからこのように明示的に逸脱している地点において、逆にカント固有の知覚理論が浮かび上がってくることである。マクダウェルは、さしあたりは命題的に把握されておらず、推論的關係において信念と関係するのではない非論証的な表象 content を認めつつ、そうした content も原理的には概念的 content だと捉える。けれども概念には還元できない感性の形式固有の表象 content を確保している点にカントの限界を見出している。ここから次のようなカント像を描出することができるだろう。すなわち判断以前に受容性を通じて与えられる直観 content に対する (純粹悟性) 概念の普遍妥当性を認めつつ、同時に感性に固有な表象 content の分節化も堅持するというものである。

3. カントの知覚論

本稿の目的は概念主義論争に決着をつけることではないし、概念主義的、非概念主義的カント解釈の間の論争を最終的に解決することですらない。むしろこの論争を通じて浮かび上がるカント像を素描し、そこから翻って現代の論争に一つの可能性を提示することである。この狙いに照らしたときに興味深いのは、これまでに見てきたハンナとマクダウェルのカント解釈が、相互に対立しながらも重要な点でかみ合った議論を展開していること、また示唆的な仕方でもカントそのものともすれ違っていることである。

一方で、前節までにみたところを踏まえていけば、主要テーゼにおいては対立しているハンナとマクダウェルのカント理解は、少なくとも三つの重要な点で共通している。

- i. 知覚経験が判断に先立つ非命題的非推論的内容をもつ。
- ii. 知覚の形成は構想力の形像的総合の自発性と不可分である。
- iii. 知覚のあらゆる素材の受容にこの自発性は浸透している⁵。

他方で、両者は示唆的な仕方でもカントからの逸脱を示している。ハンナは本質的非概念主義をカントに見出しつつも、いかなる概念の下にも収まらない「はぐれ対象」の存在に固執する。これによってあらゆる知覚対象に対するカテゴリーの妥当性という演繹論の企てそのものを否定せざるをえなくなった。マクダウェルはあらゆる直観が統覚の統一の圏内に収まり可能には概念を通じて特定されるものだという演繹論の企てに忠実であろうとするあまり、感性の形式に固有な内容の分節化を否定する。これでは感性の悟性への、また直観の概念への還元不可能性というカントの基本姿勢を保つのが難しくなる。

以上のようなハンナとマクダウェルの共通理解とカントからの逸脱から浮かび上がるカントの知覚論とは、次のようなものである。感性を通じて素材が与えられる際には常に、判断を下す悟性とは区別される構想力の自発性が働いており、知覚経験の非命題的非推論的内容の形成に参与している。この内容は概念に還元できない感性の形式としての空間時間に従って、知覚主体の自己中心的視点に直接的に呈示されているが、しかし純粹悟性概念によって秩序づけられてもいる。つまりカントの立場とは、一方で知覚経験の非命題的非推論的内容を本質的に非概念的なもののみならず、他方でそれに対する純粹悟性概念の妥当性をも肯定するというものである⁶。しかし果たしてこのような立場は可能なのか。両方の点をカントに即してみよう。

まず、知覚内容が非概念的であるというテーゼの方から見てみよう。先に見たようにマクダウェルにとって「概念」は、主体に対する対象の直接的現前に依存した内容も含みえる。それに対してハンナは、対象の直接的現前に依存しないことを「概念」の条件に含めている (Hanna 2011a, 346-354)。「概念」の内容は、例えば電話などで対象に直接対面していない主体にも言語的に伝達できるものでなければならぬのだという⁷。ハンナとマクダウェルは知覚内容が主体の一人称の視点に与えられる対象の直接的現前に依存したものだという理解では一致していながら、「概念」についての理解が異なるために同じ内容を一方は非概念的とみなし、他方は概念的とみなすという食い違いを見せている。カントではどうか。

カントにとって「直観」と「概念」の区別は、個別的で無媒介的に対象に関係する表象と、メルクマーを介して対象に関係するがゆえに多くの事物に共通する一般的表象との区別に当たる (A320/B377, IX91)。直観と概念の表象内容の質的な差異をさらに詳細に論じているのが「反省概念の二義性」である。諸表象が心的状態において相互にとりうる関係は、感性と悟性のどちらの認識能力に属するかによって質的に異なる。「論理的形式ではなく諸概念の内容が問題である場合、つまり事物そのものが一様なか多様なか、一致しているのか対立しているのか等々が問題である場合、事物は我々の認識力すなわち感性と

悟性に対して二重の関係をもちうるが、そのうちに事物が属するこの場所に、諸表象相互が属し合う仕方がかかっているのだから […]」(A262/B318)。例えば内的なものとの外的なものに関して、カントは次のようにいう。「しかし直観のうちにはある物一般の単なる概念のうちには決してないものが含まれており、これは単なる概念によっては決して認識されないだろう基体を与える、これすなわち空間であって、それが含むすべてのものとともに全く形式的、あるいはまた実在的な関係からなるものであるから […]」(A284/B340)。概念に関する限り内的なものがなければ外的関係は考えられないが、感性的直観として与えられる現象に関してはそうではない。感性においては内的なものがそれ自体外的関係からなるからである。ここでさらに、単なる外的関係からなる現象も表象の「内容」を与えるということも認められねばならない。質的にも量的にも内的規定に関しては何ら異ならない二つのものでも、空間内で別々の位置にあれば数的に区別される。例えば「あれとこれは異なる」という判断の理由を、概念には還元できない感性の形式は与えることができる。従ってカントは、信念の理由となるのは概念的な内容だけだというマクダウェルのテーゼに反して、理由の論理空間のうちに感性的内容という非概念的な内容を含めていることになる。

感性の形式が概念に還元できない固有の内容を与えるとすると、それでは、カテゴリーの妥当性の領域から外れた「はぐれ対象」があるのか。ハンナも認めるように、カントは第二版演繹論の結論においてそのような可能性を否定している。それを踏まえて感性の形式に対する概念の妥当性について詳述するのが「図式論」である。カテゴリーと経験的直観とは異種的なものであるがゆえに、前者を後者に適用するには両者とも同種性をもつ第三項、超越論的図式ないし超越論的時間規定が必要となる。図式は個別的な直観ないし像そのものではなく、「ある概念にその像を調達する構想力の一般的方式」(A140/B179f.)である。図式を介して概念と個別的直観は関係するといわれるが、それは構想力の総合が各々のカテゴリーに従って感性一般の形式である時間を規定することによる。第二版演繹論でカントが、知覚を産出する構想力の総合がカテゴリーに従うと結論づけたときに具体的に考えていたのは、こうした超越論的時間規定だったはずである。感性を通じて個別的な直観が与えられる際に、これらの直観は図式を介して純粹悟性概念に従った秩序に服している。感性の形式としての時間は、それ自身は概念とは異種的なものであり続けるとはいえ、構想力の総合を通じて規定されることで純粹悟性概念と結合されたものとして個別的直観を提示する。空間的に別々の位置に置かれたものは、その内的規定が全く同じだったとしても、量の図式としての数という点で区別され、継起的な時間のうちで数え上げられることで「あれとこれは異なる」といった判断の理由となる。カテゴリーの普遍妥当性とは、図式を介してカテゴリーと関係しない無秩序な直観はないということである。感性形式に基づく非概念的な内容は、非概念的でありながらも構想力の超越論的総合が産出する図式を介して、もれなく概念的な秩序に組み込まれているのである。

結び

現代の概念主義論争とカントの間には、非常に生産的な相互作用が働いている。一方でカントの知覚論に正当に光が当てられるようになったのは現代の論争の効能の一つである。他方で、現代の概念主義と非概念主義の両陣営に対して、カントは一つの新たな提案を与えてくれる。つまり両陣営の本質的な点を排他的に捉えるのではなく、独特な仕方ですべて併せもつ立場もあるのではないかと提案である。非概念的な内容がそのまま、構想力の図式を介して概念と連関することで判断の理由となりうるという可能性を、カントは示唆しているのである。

注

科研費〔25770004〕の助成に感謝いたします。

- 1 多くの論者の立場の多様性からすると、現在ではこの分類にはうまく収まらない立場もあることは事実である。とはいえ本稿では、マクダウェルに対抗しようとするハンナの議論構築にある程度追随するという目的から、さしあたりこの分類を借用しておく。
- 2 カント解釈としては例えばAllais 2009。
- 3 Grüne 2011; Bowman 2011, 422-425は、Hanna 2011aに挙げられたカントからの引用が本質的非概念主義の典拠としては無効であることを逐一指摘している。本稿もその指摘に概ね賛同する。けれども彼らの重大な欠点は、ハンナのいうカント的非概念主義の最強の論拠である「二つの手」論証を考慮していない点である。
- 4 カントの著作からの引用はアカデミー版カント全集により、巻数とページ数を記す。『純粹理性批判』に関しては、初版Aと第二版Bのページ数を記す。
- 5 もちろん、ハンナとマクダウェルがこれらの点で共通してカントを誤解しているという可能性は残る。また異なるカント理解が存在するのも事実である。たとえば知覚経験の内容を命題的なもの、判断を含むものとみなす解釈がある(Rödl 2005, 120-127)。他方で知覚形成にいかなる自発性もみとめないか、あるいは感性を通じた知覚の素材の受容そのものは自発性とは無縁だという解釈もある(Watkins 2008; Schulting 2012; Tolley 2013)。そして後者の解釈も一枚岩ではない。Watkins 2008, 518-525は受容された所与が経験的概念のためのインプットという認知的役割を果たすとし、Tolley 2013, 126-127はこの所与にも対象への独特な志向的關係を認めるのに対して、Schulting 2012, 73は非概念的所与の認知的役割を否定している。とはいえ本稿はハンナとマクダウェルの一致点を支持するための突っ込んだ議論は控え、暫定的にそれを受け入れた上で論を進める。
- 6 現代の論者の中ではPeacock 1992, 61-98に近いといえるかもしれない。
- 7 ハンナのこの見方を、Bowman 2011, 432f.はマクダウェルが諫めた「概念」についての二つの見方を混同していると批判している。一つは「ある表象状態の内容の諸部分ないし諸側面としての概念」（語によって表現されるもの）、もう一つは「表象の手段としての概念」（表現するもの）である(McDowell 1998, 217-219)。しかし以下にみるようにカントに関してはこの批判は当たらず、マクダウェルの概念理解の方が退けられるべきである。

参考文献

- Allais, L. (2009), 'Kant, Non-Conceptual Content and the Representation of Space', *Journal of the History of Philosophy* 47 (3): 383-413.
- Bowman, B. (2011), 'A Conceptualist Reply to Hanna's Kantian Non-Conceptualism', *International Journal of Philosophical Studies* 19 (3): 417-446.
- Grüne, S. (2011), 'Is there a Gap in Kant's B Deduction?', *International Journal of Philosophical Studies* 19 (3): 465-490.
- Hanna, R. (2008), 'Kantian non-conceptualism', *Philosophical Studies* 137: 41-64.
- (2011a), 'Beyond the Myth of the Myth: A Kantian Theory of Non-Conceptual Content', *International Journal of Philosophical Studies* 19 (3): 323-398.
- (2011b), 'Kant's Non-Conceptualism, Rogue Objects, and The Gap in the B Deduction', *International Journal of Philosophical Studies* 19 (3): 399-415.
- McDowell, J. (1996), *Mind and World*, Cambridge: Massachusetts.
- (1998), 'De Re Senses', in *Meaning, Knowledge, and Reality*, Cambridge, Massachusetts: Harvard U.P.
- (2009), *Having the World in View. Essays on Kant, Hegel and Sellars*, Cambridge, Massachusetts: Harvard U.P.

- Peacocke, C. (1992), *A Study of Concepts*, Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.
- Rödl, S. (2005), *Kategorien des Zeitlichen. Eine Untersuchung der Formen des endlichen Verstandes*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- Schulking, D. (2012), 'Kant, Non-Conceptual Content and the 'Second Step' of the B-Deduction', *Kant Studies Online*, 51-92.
- Speaks, J. (2005), 'Is There a Problem about Nonconceptual Content?', *The Philosophical Review* 114 (3): 359-398.
- Tolley, C. (2013), 'The Non-Conceptuality of the Content of Intuitions: A New Approach', in: *Kantian Review* 18 (1), 107-136.
- Watkins, E. (2008), 'Kant and the Myth of the Given', in: *Inquiry: An Interdisciplinary Journal of Philosophy* 51 (5), 512-531.

